J. C. O. S. M.

Vol. 5 No. 3 (May. 1975)

全科協ニュース

1975年5月1日発行
(通巻第23号)
全国科学博物館協議会
東京都台東区上野公園
国立科学博物館内
〒110
TEL.822-0111(大代)

おもな内容：◇無関心のアプローチ（その4）東京都高尾自然科学博物館　新井二郎　**◇特別展報告　安全技術の歴史展**　産業安全技術館　東海林菊夫　**◇全科協北から南から**　学芸員の仕事のわりふり　大阪市立自然史博物館　宮武頼夫　**◇会員館園の紹介**　熱川バナナ・ワニ園　当園が保存する資料　中村武久

無関心へのアプローチ（その4）

東京都高尾自然科学博物館　**新井　二郎**

「博物館」という語を目にしたり耳にしりすると，珍品あるいは上等なものが並べられている所とか，非常に難しくて気軽に近付けない所とかいったものが，ふと浮んでくることが私にはある．博物館に勤めていながらこれではと少々はずかしいのだが，子供の頃に感じたあの重々しく少々暗いような「博物館」というイメージは，そう簡単には消えてしまいそうにない．最近の博物館を見れば，はるかに明るく楽しい所であり，しかも内容の深い所だと思えるのだが，やはり昔の「博物館」という語のイメージから，今も博物館を敬遠してしまう人は決して少なくはないだろう．

このようなことで，博物館というものを遠くからながめ，無関心となった人たちを博物館に引きつけるのには，「博物館」の新しいイメージを浸透させる強いものが必要なのだろうが，今のところ，従来の「博物館」からガラリと変った新しいものが，そう簡単に現われそうもないし，私にももちろん考えつかない．私たちの所のような小さな博物館では，きわめてオーソドックスな博物館の形の中で，少しずつ工夫してゆくことで精一杯といったところである．

ところで「無関心へのアプローチ」ということであるが，すでに前号まで3回にわたって各館の専門の方々が述べておられ，その内容は多くのことを教示してくれるので，無関心層を十分把握していない私には今さら述べるようなことがない．ここでは，私の勤める館のことで感じたものを少し述べることでお許し願いたい．

東京都高尾自然科学博物館は，東京の西部の山地に接した所にある．この都心から50Km近くはなれた博物館に来る人たちは，その大部分が博物館の背後にある国定公園の高尾山にやって来た人たちであり，行き帰りのついでに寄る人たちである．来たついでから博物館に入ってみようというのでは，関心があるから博物館を利用したとは必ずしも言えない．高尾山は東京の小中学生の遠足の場ともなっているので団体入館も多いが，館利用を主目的としてはいないので，これもまた同じようなものである．この点で，都市内にある博物館と入館者の内容に違いが見られるのではなかろうか．都市内にある博物館に入る人の多くは，その博物館に行くことを主目的としていると考えられるからである．たとえ，特別展とか新しい展示を，都市内の博物館とまったく同じ内容で行ったとしても，やはり入館者の内容がそれほど変るとは思えない．

ただ背後の自然と展示や収蔵資料との間に関連を持たせることで，少しでも博物館に関心を持ってほしいと期待しているところである．では，私の館では，関心を持って利用する人がいないかと言えば，そうでもなさそうである．それは野外教育活動である．背後に広がる高尾山やその周辺の山や丘陵を利用して，年十数回の自然観察会や自然に親しむ会を行っている．これら行事は，都の広報紙・新聞・テレビ等で知らせているが（都立なのでこの点都合がよい），これに対する申込みは多く，たいてい募集数をはるかに超え抽選となる．館の規模・指導・自然の収容力などからして，全ての人に参加してもらうというわけにはいかず，かなりの人たちの参加機会を館がつぶす形となってしまう．これら参加希望者は，関心があるから申込むのであろうが，必ずしも積極的な関心を持つ人たちとは言い切れず，潜在的に関心を持ちながら，一般には無関心のように見られてきた人たちも多くいるようである．つまり自然に対しての興味・関心がありながら，それをどのような方法で満たしてよいかわからない人，機会のない，既製の会に入りずらい人，……などが多いからである．

職業や年令がいろいろな層にわたるこれらの人たちが，自然に対する積極的な関心を持てるような機会を博物館はつくるべきであるし，それにより博物館というものにも関心を持ってもらうように考えるべきである．ただ博物館だから参加した訳ではなく，関心を持っていたものを行うところがたまたま博物館であったという人ももちろんいる．しかし，自然に関心を持てるような活動を，博物館ではなく他の組織で行っても別に差し支えあるわけではなく，博物館で行う活動が，その中に博物館ならではといった内容を含んでいれば良いはずである．さまざまな分野において関心はあるが，それを満せないでいる人たちがいると思われる．それらの分野の中には博物館が手伝いできるものも少なくはなさそうである．

特別展報告

安全技術の歴史展

産業安全技術館　東海林菊夫

〝赤旗法の成立とはどういうことですか〟とお母さんとご一緒のかわいいお客様から質問をうけました．〝赤旗法〟というのは，1865年イギリスで制定された時代的な法律で，その内容は〝自動車の時速を国道では，6.4 Km市街地では3.2 Kmに制限するもので，また乗員3名のうち1名は，赤旗をもって車の前方50mを前ぶれしながら走らねばならぬ―平凡社世界大百貨事典より―というものです．この時代の技術開発や陸上交通の発達などについて簡単に説明し，後日，詳しい資料の送付を約束して，お客様にお別れしました．

この質問の出た「安全技術の歴史展」は3月10日から4月30日まで，当館2階特別展示場で開催しました．企画は当館で行いましたが，パネルの原稿は,「安全技術の在り方」に深い感心をもち，その歴史を追っている研究員が収集した膨大な資料から，今回の主旨に沿って，オリジナルなものを作成してもらいました．

展示の企画から準備の段階において，一番の心配は，安全技術に関する歴史的な〝モノ〟をどのくらい集めることができるか，にありました．幸い，ある保護具メーカーの広報課長さんから情報を得て，予想以上の〝モノ〟の収集が出来ました．これらの中には，昭和初期，わが国で開発された1号型から現在使用されているものまで11種類のガス検定器を年代別に体系的に展示出来たものもあります．

さて，展示にあたっては，この展示会の目的とする〝技術開発が人間に画期的な恩恵をもたした反面，これまでに見られなかった新しい危険性をも伴うという不幸な過去の歴史をふりかえり，これからの安全の在り方をさぐる〟をどの様に表現するかにありましたが，これらのことがらを，次の様に構成しました．

1. **時代別に見た技術と事故の特徴**（パネル）
2. **個々の技術の歴史と事故の関係**（パネル）
3. **未来と安全**（パネル）
4. **事故と慰霊碑**（写真パネル）
5. **年表**（パネル）
6. **安全技術に関する歴史的な〝モノ〟**（実物）

内容からくる堅苦しさをやわらげる必要から，出来るだけ実物や写真を多く使う工夫をし，収集した実物の中から75点を展示しました．一方写真は，原稿執筆者の手持が豊富だったこともあり全体として133葉使用しました．また，パネル架の表面は布にヒダをつけ，やわらかい感触を持たせましたがこれらは大変効果があった様です．

毎回，広報には苦心していますが，今回は新しい試みとして，特別展に先だち，展示内容の〝予稿〟という形で，安全に関する雑誌に掲載し，一般の人に対し事前に展示の内容を知らせることにしました．これは，比較的効果のある手段で，今後も取りうる方法と思います．

展示技術のうえでは特に新しいものはありませんでしたが，見学者から寄せられた声の中には〝この展示会の内容を職場の教育に役立てる〝とか〟見た結果を従業員に話す〟などとあり，一般には，最近の新しい安全技術に興味があり，過去のことについては関心を示さないのではないかと懸念しましたが，結構反響があり，展示会の内容が受け入れられたものと考えます．

なお，歴史的な〝モノ〟は，時間の経過とともに，どんどん散逸してしまう事実を，今回の展示を通じて痛感しました．これらを何んかの形で積極的に収集し，もしそのことが不可能ならば，所在情報として入手しておくべきだと思います．

後日，かわいいお客様から，資料送付に対して，かわいいお礼の手紙をいただきましたが，これらも博物館に対して，何んらかの形で興味を持ってもらい，将来のお客様として期待しながら，「安全技術の歴史展」の報告を終ります．

全科協北から南から

博物館学芸員の仕事のわりふり

大阪市立自然史博物館　宮武　頼夫

新館の建築計画・移転・新しい展示の完成に慌しい数年が過ぎ，自然史博物館という名のものに新たにオープンしてから丁度1年たった今，学芸員としての自分が，博物館での仕事をどのように進めていったらいいのか，真剣に考えねばならぬことを痛感している．博物館の学芸員の仕事が，資料の収集と保管・研究・展示・普及の4つの軸を基本としていて，よほど特殊な博物館か片輪の博物館あるいは恵まれすぎた(？)博物館（スタッフが多すぎるなど）でない限り，どの要素もカットできないことは，いまさらいうまでもない．しかし我々はそれぞれの内容の仕事に，それだけの比率で時間とエネルギーを注げばよいのだろうか．

これは館の事情によっても異なるであろうし，もちろん学芸員個人々々の考え方の相違によっても大きく変ってくることだろう．特別展の前の1～2カ月は展示準備にかかりきらざるを得ないし，また学会講演や研究報告の原稿しめ切りが近ずけば，資料の整理などはそっちのけで研究に没頭することになる．従って，学芸員の仕事ぶりを短かい期間に垣間みた時は，ひとつのことだけ馬車うまのようにやっている人間と映るし，時々訪れる人には「支離滅裂なことをやっている人種」ととられるかもしれない．一日を四等分して全ての仕事を少しづつすることが非現実的である以上，これはある程度避けられないことである．しかし，たとえば1年間というまとまった期間内に遂行された仕事の内容は，やはり一種のバランスがとれていることが必要ではないかと思う．

学芸員をその仕事ぶり（いかに真面目に熱心に働くかということではなく）から分けると，実に色々なタイプがある．ひんぱんに採集などにでかけて多くの資料を収集し，きっちり標本に作って整理するのには熱心だが，研究論文などは一向にかかない学芸員，反対に自分の専門分野の研究には極めて熱心で，研究論文もかなり発表するが，館の他の事業には一切タッチしようとしない人，いろいろな研究会やサークルの世話が好きでしょっちゅ出かけ館内には滅多にいない人，などあげていけばきりがない．彼等は一見個性的な活動を続けているようにみえるが，スタッフの数が十分でない博物館においては，やはりそれぞれ問題があるように思われる．一年が終ってその仕事を通してふりかえってみた場合，研究論文が少なくとも2・3篇は発表できるだけのオリジナルな研究の継続が，まず望ましい．研究活動は学芸員の仕事の主軸であって，これを抜きにしては学芸員個人の資質を低下させるだけでなく，永い目でみた博物館の発展はあり得ない．博物館の事業全体に通じる重要なペースであり，推進力になっていると思われる．だからといって研究ばかり続けておればよいというのではなく，自己の専門分野に関わる資料の収集と整理はもちろんのこと，関連分野を拡げていって積極的な資料の収集につとめ，一年たてば着実に資料が増えているようにしたい．研究の成果や収集した資料などは，展示や普及事業（行事や出版物など）を通じて，できるだけ早く一般の人に知ってもらうよう努力したい．学校というところが，多少とも結論めいたことを教える場であるなら，博物館ではともに学び，考え，そして討論する場にしたい．これらの仕事は理論的にはたしかに一つの流れにのることになるが，実際には有機的にからみあっているので，起承転結にはなり難い．しかし，1年間の仕事を終って，どのパートをとってみても，これだけはきちんとやった一という実感がもてるような進め方でいきたい．たとえ，それぞれのパートが十二分にできなくても，1年ごとにまとまりをつけるくりかえしでゆくということである．

このペース作りは一体だれがやるのか，それは，博物館の仕事の内容の比率はかくあるべしという理論でもなく，まして管理者から押しつけられるものでもない．学芸員自身が考えて，作りだしてゆくべきものである．このペース作りがどうしてもうまくゆかない場合は，博物館の運営に何らかの問題がある場合が多い．例えば，極端にスタッフの少ない博物館では，最小限の必要なことをするのに追われて，研究などそっちのけになり，上述のペースは作れない．そのためには，スタッフの増員なり，できるところは補助的な要員でうめてゆく措置が必要であろう．また管理者の理解の浅さから，終始不本意にふりまわされて，ペース作りができない場合もあろう．学芸員の仕事は，やはり一年単位くらいで評価すべきものである．

以上，6部門(動物・植物・昆虫・地史・回収・普及)で学芸員が11名いる自然史系の博物館の学芸員の1人として私見を述べたが，まだ考えている段階で，結論がだせるところまではいっていない．

会員館園の紹介

熱川バナナ・ワニ園

当園が保存する植物資料　　中村　武久

社会教育の一翼を担う施設として，近代の博物館動植物園はいかにあるべきか，これは館園に関わりある当事者にとっては，誰しもが常に胸中に抱え，最も今日的重要課題としてその具体策を模索しているところであろう．

近年博物館や植物園規準などが論議され明文化されつつあるが，これもその現われの一つといってよい．しかし規準というものはともすると形骸のみで，枠を限定するのみに終り，多面的な機能や，将来へのユニークな発展を助長する部分が欠けることもしばしばである．

組織形態とその機能が深いつながりをもっていることはいうまでもない．その点国公立の館園では，規準を強化拡充すればそれなりに機能も高められていくであろう．しかし民間園では形よりむしろ機能を先行させねばならない事情がある．それは経営という大前程を抱えていることで，いかに高邁な理想をかかげても，経営が成り立たねば何一つできないのである．

現在我が国の植物園は約80園（協会加盟園は78園）あり，そのうちの約60%が民間園である．これらの植物園がそれぞれに国公立園と異なる難題を抱えながらも，更に将来的な展望に立って頑張っている現状こそ無視されてはならないと思う．

当園もいうまでもなくその民間園の一つであるが，幸い入園者が多いことなどもあって，経営面では安定した方向を維持しており，更にユニークな植物園づくりをモットーとしている木村園長の姿勢もあって，今日広く各方面から好評をいただいている．

熱帯植物を主体とした植物園は，日本の植物園の中にも数あるが，これらの多くは内容的にほぼ類似しており，保有する種類はどこの園でもたいして違いがみられない．多少植物園としての規模や配置（展示）に工夫がこらされ，全体の景観，雰囲気に独自性がみられるていどである．たしかに展示法はその効果を高めるのに重要な条件であることはいうまでもない．しかし限られた資料ではそれがどう展示されようと自ずから限界があろう．すなわち，豊富な資料をもってこそ，植物園としてのさまざまな教育的方法が見出せるのである．

当園がもっとも苦心し，配慮しているのはこの点であり，独自の力で熱帯各地から植物を導入し，更にそれらの植物を健全に育成することである．しかしひと口に植物の導入というが，実際には植物防疫上の問題や，熱帯現地での植物収集については幾多の難問があり，決して容易なことではない．また導入した植物を健全に育成するための栽培技術，管理上の諸問題を考え合わせると，予算処理の中で運営されている国公立園ではとても想像もつかぬ程の高負担である．

ともあれ豊富な且つユニークな資料を持つことを第一義とする当園は，１人３役，４役をいとわず，全職員が一丸となって努力し，現在約6,500種（但し園芸品種も含んでいるが）を保存育成している．

この数は国外の著名な植物園とは比較にならないが，我が国では有数のものと自負している．なかでもラン科植物約2,000種，ブロメリア類（アナナス科の Aechea tillandsia, Billbergia など）約500種，シダ植物約500種，熱帯果樹（バナナ，マンゴウなどは園芸品種を含む）100種，熱帯性スイレン（園芸品種）約60種などは系統的にまとまったコレクションとして注目されている．

更にこれらに加え，我が国で始めて栽培に成功し近々美しい花を開こうとしているヂェイド，バイン，また珍らしい東南アジア産のコンニャク類数種など，他園にみられない種類を一つ一つ数えれば枚挙がない．

ここ数年来，折あるごとに東南アジアをはじめ中南米方面から，植物防疫上の問題の少ないランやシダの積極的な収集を計っており，今後更に増加される予定である．しかし野生種を収集してきた場合，それらの種類の同定が問題で，現在もラン科植物は３分２のていどしか判っていない．ところが一方，こうした資料を保存することが，やがては専門家の研究に資するはもちろん，民間園としては稀有な当園の研究部門の研究資料として，おおいに役立っているのである．

最近まで，収集した野生種は隔離温室や補助温室に収納して育成管理していたが，先頃新たに施設を一部増改築し，野生ランの展示温室を公開した．通路の半面に並べた豪華な花をつけた園芸種と，対照的に眺められるそれらの原種ともいうべきカトレア，シップ（Paphiopedillum），バンダなどの野生種の数々は，一般入園者の関心を集めている．